



Title	<図書紹介>アンドレア・グローネマイヤー著豊原正智, 犬伏雅一, 大橋勝訳『ワールド・シネマ・ヒストリー』
Author(s)	橋本, 英治
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 94-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52973
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アンドレア・グローネマイヤー著 豊原正智，犬伏雅一，大橋勝 訳
『ワールド・シネマ・ヒストリー』
晃洋書房 2004年 213ページ
橋本英治／神戸芸術工科大学

映画は総合芸術とよばれ、あらゆるジャンルの出来事を取り込んで変化しつづけています。産業自体の衰退は別にして、映画という言葉が意味するものはビデオ作品等も含まれる状況にあります。テレビ映画（ビデオ作品）といった言葉も日常ごく普通につかわれています。映画は映像という言葉と同等に用いられ、果てしない意味の複合体となりつつあります。ここで、いま一度、映画の意味を問い直し整理する時期が訪れているようです。

その点から考えると、今回訳出された『ワールド・シネマ・ヒストリー』は非常に挑発的な原題を持っています。書名は『FILM』という一語であり、このことは著者自身や訳者がこの書物の特徴として「訳者はしがき」や「まえがき」で指摘しています。

「著者はそのような「映画」を取り巻く環境の変化をも考慮する時、「歴史」を主要な軸として通しつつ、「メディア」としてのフィルムを意識し“FILM”というタイトルにしているのではないだろうか」（訳者はしがき）

「「映画（film）とは何か？ この言葉（film）は、「皮膜」というほどの意味であり、元来は1つなりの画像が記録された皮膜を施したセルロイドを意味するに過ぎない」（著者まえがき）

「映画（film）とは何か？」というフレーズはアンドレ・バザンの『映画とは何か（qu'est-ce que le cinéma）』（1958年）（全四巻）を思い起こさせます。こちらは film で

はなく *cinéma* という言葉が用いられています。さらに一巻目のサブタイトルが「映像言語の諸問題」（*Ontologie et Langage*）となっていることから分かるように、まさに映画の映画であるべき存在の根拠を問うことを目的にしています。映画理論の古典ですが、翻訳は現在絶版です。

これに対して、『ワールド・シネマ・ヒストリー』では FILM にこだわりをもつこと、そして、FILM という「皮膜」から始めることで、映画の映画たるゆえんである物質的な側面を出発点としています。細長い皮膜であるフィルムが、百年あまりの時間の流れの中でどのような意味の厚みをもって今日にいたったのか、その過程を様々な視点から眺めることが本書の目的だろうと思われまます。

原書はドイツで1998年に出版され、同年すぐに英語の翻訳がなされています。もともと Schnellkurs（速習）、英語で crash course（特訓、短期集中）と題されたシリーズとして刊行され、すばやく要点を理解できる書籍の意味合いが強調されています（著者のグローネマイヤーは同シリーズで他に『Theater.』も執筆しています）。これは訳者が「はしがき」で指摘しているように、映画を学ぶにあたって手軽な入門書が日本も含めて世界中で用意されていないことと深く関わりがあるでしょう。事実、訳者が述べるようにフランスでのサドゥール『世界映画全史』にしろ、イタリアのアリスタルコ『映画理論史』にしろ、また、アメリカでのボードウェルとトンプソン『Film History: An Introduction』（いまだ邦訳なし）（なんと、イントロダクション

と銘うっても、800ページ超)にしろ、決して簡単な入門書ではありません。

そして、多くの映画関係書籍が映画というビジュアルな対象を扱いながら、決してビジュアルな体裁をなしていない驚くべき事実があります。そうした書籍が映画を巡る哲学的な論述に重きをおいているにしても、一枚の写真も登場しないとは理解に苦しみます。また、印刷の都合上、章末にまとめて写真を掲載している場合も多々あります。これに対して本書では、250枚以上のイメージが、ページごとにテキストに対応して示され、その解説も充実して非常に読みやすくなっています。

大まかな目次は以下のようになります。

- 動く映像
- 映画術のパイオニア
- 映画は世界へ
- 無声映画芸術
- トーキーの発展
- 戦後
- 新しい波
- 映画とニュー・メディア
- 90年代後半の動向（この項目のみ訳者、豊原正智氏追加執筆）

第一章「動く映像」に関しては、お決まりの、「誰が映画を発明したか」の議論がなされます。また、「いつ発明したか」の年代が1895年と記述されます。ドイツ人であるグローネマイヤーとしては同郷のスクラダノフスキー兄弟のビオスコープを「映画を最初に公開したもの」として紹介しています。このことこそ、物質としてのFILMの表面に第一の意味が付与される瞬間であり、映画が決して無垢な状態でいられないことを語っています。

第一章に呼応して、原書での最終章「映画とニュー・メディア」では、意味ありげに

1995年という数字が最後を飾ります。この章の最後のフレーズを引用します。

「持ち主の少年のために2つのおもちゃの人形が競争する物語である『トイ・ストーリー』によって、1995年はじめて完全にコンピュータ上で生成された冒険物語が登場した。少なくとも技術に関する限り、夢工場にほとんど限界はない。」

映画生誕百年をへて、記念すべき映画『トイ・ストーリー』（1995年）は、現実の世界に関わりを持つカメラというデバイスから完全に解放されたわけです。1895年から1995年というちょうど百年は「世界を写す」ことから「世界を生成する」歴史であったことをこの書籍は示しているようです。

映画の制作、そして、映画を巡る様々な出来事はアメリカを中心（de facto standard）になされています。そうした中、もう一つ（alternative）の拠点としてヨーロッパ（ドイツ）から発せられる映画の情報は、中心からは見ることのできない広い視野を兼ね備えているようです。映画について全体をスピーディに見渡すための入門書として最適です。

それにしても、ドイツの映画関係の出来事は、例えば、ヴェルナー・ネケスの『フィルム・ビフォー・フィルム』（映画前史の様々な動く映像の歴史としてのドキュメントフィルム）のように、とにかく意表をつくものが多いようです。